

診 療

腺扁平上皮癌化した巨大類皮嚢胞腫の1例

香川医科大学母子科学講座

和田 理恵 加藤 賢朗 山城 千珠 大西 洋一
藤本 康之 単 莉 田中 宏和 林 敬二
柳原 敏宏 原 量宏 神保 利春

香川医科大学第二病理学講座

阪本 晴彦 宇多 弘次

Adenosquamous Carcinoma Arising in Benign
Cystic Teratoma of Ovary

Rie WADA, Yoshio KATO, Chizu YAMASHIRO,
Youichi OONISHI, Yasuyuki FUJIMOTO, Li SHAN,
Hirokazu TANAKA, Keiji HAYASHI, Toshihiro YANAGIHARA,
Kazuhiro HARA and Toshiharu JIMBO
Department of Perinato-Gynecology, Kagawa Medical School, Kagawa
Haruhiko SAKAMOTO and Hirotsugu UDA
Department of Second Pathology, Kagawa Medical School, Kagawa

Key words: Dermoid cyst • Ovary • Adenosquamous carcinoma

緒 言

卵巣類皮嚢胞腫は全卵巣腫瘍中、約20%¹¹⁾と最も高頻度にみられるが、その悪性化は稀である。類皮嚢胞腫は三胚葉性の成分を有するため、各種の癌や肉腫が発生し得るが、扁平上皮癌が70~80%と最も多く、ほかには腺癌、肉腫、カルチノイド、絨毛癌などの報告を認める¹³⁾¹⁹⁾。今回我々は、悪性変化の中で非常に稀な組織型である腺扁平上皮癌化した、巨大な類皮嚢胞腫の1例を経験したので、文献的考察を加えて報告する。

症 例

患者：T.T. 65歳。2妊2産。

家族歴・既往歴：特記事項なし。

月経歴：初経15歳，閉経51歳。

現病歴：1989年4月頃より腹部膨隆・るいそうに気付いたが放置していた。以後徐々に腹部膨隆が増大してきたため、同年7月当科受診し、巨大卵巣腫瘍の診断にて精査・治療目的で入院した。

入院時所見：身長160cm，体重62kg，腹囲112cm（臍高），腫瘍底長56cm（恥骨上縁より）。腹部膨隆・るいそう著明。

血液検査所見：軽度の貧血，CRP 上昇を認めたほかは正常範囲であった。血清腫瘍マーカーではCA19-9：123U/ml，CA125：310U/ml，TPA：161U/lと中等度上昇を認めた。

超音波断層法所見：上腹部から骨盤腔にかけて、不均一な echogenic な単房性嚢胞性腫瘍を認めた。

X線-CT 所見：超音波断層検査と同様に、辺縁平滑で壁の厚さは均一で、内部に隔壁を認めず、おおむね均一な water density の嚢胞性腫瘍を認めた。左胸水を少量認めたが、腹水は認められなかった。

手術時所見：上記諸検査より、巨大な卵巣腫瘍の診断を下し、開腹術を施行した。腫瘍は右卵巣原発、超成人頭大であった。腫瘍壁の肥厚した部

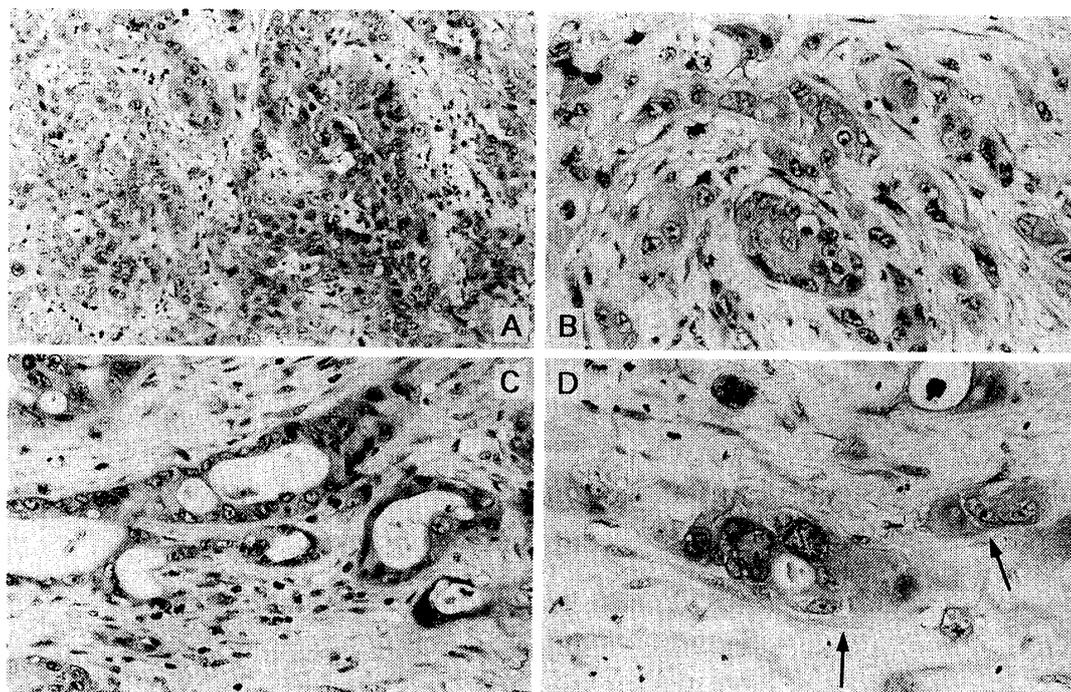


図1 顕微鏡所見 (H-E 染色)

(A, 100倍) 全体に分化度の低い扁平上皮癌の像を示している。(B, 200倍) 大小不同の扁平上皮癌細胞が小包巢状あるいは索状に配列している。(C, 200倍) 一部に、腺管状に配列している腺癌細胞もみられる。(D, 200倍) 細胞間橋の形成が認められる(矢印)。

分の迅速病理組織検査にて悪性の所見を得たため、腹式単純子宮全摘除術、両側付属器摘除術、骨盤リンパ節郭清、及び大網切除術を施行した。傍大動脈リンパ節転移を認めたが強い癒着のため、完全郭清は行えなかつた。無色透明・漿液性の腹水を少量認めたが、細胞診は class 1 であつた。また左卵巣、子宮は正常であつた。

肉眼的病理所見：右卵巣腫瘍は単房性で内容は脂蝟性泥状で、脂肪・毛髪を含み、嚢胞壁内の一部に軟骨様の部分も認められた。嚢胞内容液は約 20l で、細胞診では悪性の細胞を認めなかつた。内容液吸引後の計測で被膜の直径は約 60cm、被膜は画像検査では明らかではなかつたが、一部嚢胞壁の肥厚した部分を認めた。

顕微鏡所見(図1)：肥厚部に一致して、大型過染性の核、明瞭な核小体を有する大小不同の癌細胞が、多くは充実性小包巢状に、あるいは索状に配列し、浸潤性の増殖をするのが認められた。また、充実性に増殖する癌細胞間に、細胞間橋の形成が認められ、分化度の低い扁平上皮癌と考えら

れた。更に腺管状に配列する部分も散見され、腺腔内や一部腫瘍細胞の胞体内には diastase 消化 PAS 染色で陽性に染まる粘液が認められた。一部には印環細胞型の癌細胞も認められた。また、後腹膜リンパ節、右総腸骨リンパ節に転移を認めた。非癌部の嚢胞壁は、大部分毛髪を伴う表皮様の構造を示していた。よつて成熟嚢胞性奇形腫の悪性転化による、腺扁平上皮癌と診断した。また、臨床進行期分類は stage IIIc であつた。

術後経過：術後18日目頃より大量の左胸水貯留・呼吸困難を認めたため、胸腔穿刺を施行した。胸水は血性で細胞診は class 5, adenocarcinoma であつた。化学療法として、FCAP 1 コース、FAM 2 コース施行したが全身転移を来し、胸・腹水の貯留が持続し、腎不全となり、術後63日目に死亡した。

考 察

類皮嚢胞腫の悪性化の最初の報告例は、1845年 Forget によるものとされているが¹⁸⁾、詳細な検討に関しては Peterson(1957)¹⁹⁾によれば、1857年に

Pesh によつて初めてなされたという。類皮嚢胞腫の悪性化の頻度に関しては、0.3~4.8%と報告されている¹¹⁾¹⁹⁾²¹⁾。本邦の報告例では1971年川瀬ら⁴⁾が41例を、また1977年井上ら¹⁾が自験例を含め49例を集計している。また、1981年高階ら⁷⁾は、1897年 Yamagiwa²²⁾の初報告以降、1980年までの51例を集計している。更に1989年西川ら⁵⁾は川瀬らの集計以降の27例を加えている。

本腫瘍の発生の平均年齢は Peterson¹⁹⁾45.4歳、川瀬ら⁴⁾51歳で、類皮嚢胞腫の好発年齢が20~30歳であることより、約20~30年の間に悪性化を来すことが示唆される。

類皮嚢胞腫は三胚葉成分よりなるため、あらゆる組織の悪性化が考えられる。Peterson¹⁹⁾による227例の集計では扁平上皮癌79%、肉腫8%、腺癌7%、カルチノイド2%であつた。類皮嚢胞腫の三胚葉成分のうち、外胚葉成分、特に皮膚類似の組織が最も多いことより¹⁹⁾、肉腫様変化よりも癌性変化、特に扁平上皮癌の発生頻度が高いと考えられる。

腺癌と扁平上皮癌の合併するものは極めて稀である。1968年 Climie and Heath¹³⁾の review では3例集計しているに過ぎない。本邦では、Fumita et al.¹⁴⁾、Maeyama et al.¹⁷⁾、Sekiya et al.²⁰⁾、米山ら⁸⁾、高田ら⁶⁾、入江ら²⁾、米澤ら⁹⁾の計7例の報告があるにすぎない。組織型の特徴としては高田らの症例を除いて、我々の経験した症例を含めて、扁平上皮癌の中に腺癌組織の混在を認めている。

扁平上皮癌化した類皮嚢胞腫の腫瘍マーカーとしては SCC 抗原 (Kimura et al.¹⁶⁾、金城ら³⁾、吉野ら¹⁰⁾が有用であつたと報告されている。組織型の若干異なる本症例では CA19-9、CA125、TPA が高値を示し、病勢の追跡に有用であつた。

予後は、Peterson¹⁹⁾によれば、扁平上皮癌177例中5年生存率は15%である。しかしその他の組織型の腫瘍の予後は極めて不良である。本邦報告例における腺扁平上皮癌の予後については、本症例を含め、高田ら⁶⁾の症例を除き、7例中3例が6カ月以内に死亡している。他の3例は予後不明であり、残りの1例は他の原因で死亡している。また Chadha et al.¹²⁾の22例の検討によれば、予後は腫

瘍の進展度によるという。すなわち、腫瘍がカプセルを越えて浸潤している場合、80%が2年以内に死亡している。

化学療法及び放射線療法に関しては現在でも治療法が確立されていない。今後の成績の集積が必要であると思われる。

結 論

術前に類皮嚢胞腫が疑われる際、高齢者、以前より腫瘍の存在を指摘されていた場合、児頭大以上と大きい場合、全身状態の不良な場合には悪性化を疑うべきであると考えられる。

以上我々は、手術後の化学療法が無効であつた、腺扁平上皮癌に悪性変化した、巨大な類皮嚢胞腫の1症例を経験したので報告した。

文 献

1. 井上正樹, 上田外幸, 佐藤安子, 山崎正人, 平松恵三, 倉智敬一: 卵巣皮様嚢腫 (benign cystic teratoma) の悪性変化—2症例の考察と文献的考察—。産婦進歩, 29: 95, 1977.
2. 入江準二, 河合紀生子, 熊谷謙治, 土山秀夫, 浅野正英: 卵巣類皮嚢胞腫内に生じた腺扁平上皮癌の1剖検例。癌の臨床, 30: 1840, 1984.
3. 金城盛吉, 田村是六, 石館卓三: 高S.C.C.値を呈し、悪性化した腫瘍を内包した類皮嚢腫の1症例。函医誌, 12: 107, 1988.
4. 川瀬哲彦, 瀬戸俊之, 金上宣夫: 卵巣皮様嚢腫の悪性変化。産婦の世界, 23: 603, 1971.
5. 西川義雄, 土田容子, 下里直行, 中島容子, 高嶋啓一: 悪性化を伴つた卵巣類皮嚢胞腫の1例。産と婦, 56: 2474, 1989.
6. 高田文子, 伊藤雅文, 今津武彦, 熱田 明, 浅野稔: 卵巣類皮嚢胞腫の悪性化の1例。癌の臨床, 32: 328, 1986.
7. 高階俊光, 田村 元, 国崎 昭, 伊藤英樹, 渡辺亘, 堀 保彦, 橋本正淑, 川瀬哲彦, 足立謙蔵: 類皮嚢胞腫の悪性変化 (類皮嚢胞癌) —自験例2症例の報告と本邦例51例の文献的考察—。産婦治療, 43: 346, 1981.
8. 米山桂八, 横山清七: 癌化した卵巣類皮嚢腫の自然破裂による汎発性腹膜炎の1治験例。産婦の実験, 24: 1039, 1975.
9. 米澤八州子, 志田則夫, 都築浩雄, 帝威安遜, 西望, 斉藤 幹, 中村卓郎, 神山隆一: 卵巣類皮嚢胞腫癌化5例の臨床病理学的検討。日産婦東京会誌, 36: 200, 1988.
10. 吉野和男, 荒木芳美, 渋川敏彦, 高橋健太郎, 岩成 治, 北尾 学, 長岡三郎: 術前に血清 SCC 値により卵巣の類皮嚢胞癌を推測しえた1症例。産

- 婦の実際, 36: 867, 1987.
11. *Beck, R.P. and Latour, J.P.A.*: Review of 1019 benign ovarian neoplasm. *Obstet. Gynecol.*, 16: 479, 1960.
 12. *Chadha, S. and Shaberg, A.*: Malignant transformation in benign cystic teratomas: Dermoids of the ovary. *Eur. J. Obstet. Gynecol. Reprod. Biol.*, 29: 329, 1988.
 13. *Climie, A.R.W. and Heath, L.P.*: Malignant degeneration of benign cystic teratomas of the ovary. Review of the literature and report of achondrosarcoma and carcinoid tumor. *Cancer*, 22: 824, 1968.
 14. *Fumita, Y., Ueda, G., Yamasaki, M., Inoue, M., Sato, Y., Hiramatsu, K., Tanaka, Y. and Kurauchi, K.*: Adenoid squamous cell carcinoma arising in a benign cystic teratoma of the ovary. *Acta Obst. Gynaec. Jpn.*, 32: 487, 1980.
 15. *Kelly, R.R. and Scully, R.E.*: Cancer developing in dermoid cysts of the ovary. *Cancer*, 14: 989, 1961.
 16. *Kimura, T., Inoue, M., Miyake, A., Tanizawa, O., Oka, Y., Amemiya, K., Mineta, H., Neki, R., Nishino, H., Morishige, K. and Yanagida, K.*: The use of serum TA-4 in monitoring patients with malignant transformation of ovarian mature cystic teratoma. *Cancer*, 64: 480, 1989.
 17. *Maeyama, M., Miyazaki, K., Oka, M., Higashi, K., Nakayama, M. and Iwamasa, T.*: Malignant degeneration of benign cystic teratoma of the bilateral ovaries: Adenosquamous carcinoma in the right tumor and squamous carcinoma in the left tumour. *Acta Obst. Gynaec. Jpn.*, 35: 331, 1983.
 18. *Pantoja, E., Noy, M.A., Axtmayer, R.W., Colon, F.E. and Pelegrina, I.*: Ovarian dermoids and their complications. *Comprehensive historical review. Obstet. Gynecol. Survey*, 30: 1, 1975.
 19. *Peterson, W.F.*: Malignant degeneration of benign cystic teratoma of the ovary. A collective review of the literature. *Obstet. Gynecol. Survey*, 12: 793, 1957.
 20. *Sekiya, S., Iwasawa, H., Morikawa, S. and Takamizawa, H.*: Malignant change of dermoid cysts of the ovary. Report on an adenosquamous cell carcinoma and a clear cell carcinoma. *Eur. J. Gynaec. Oncol.*, 1: 16, 1984.
 21. *Yakushiji, M., Nishida, T., Sugiyama, T., Mitamura, T., Natsuaki, Y., Nagano, H., Tsunawaki, A. and Kato, T.*: Malignant degeneration of benign cystic teratoma of the ovary. *Acta Obst. Gynaec. Jpn.*, 33: 1095, 1981.
 22. *Yamagiwa, K.*: Zwei Falle von Dermoidcyste des Ovarium mit cartinomatoser Degeneration und Metastazenbildung, *Arch. Path. Anat.*, 147: 99, 1987.

(No. 6989 平3・5・11受付)